

介護者だより

第1号
(発行所)

大阪狭山市
地域包括支援センター
さやまの里
在宅介護支援センター
くみのき苑
在宅介護支援センター

〒589-0005
大阪狭山市狭山一丁目862番地の5
(TEL) 072-368-9922



介護経験者の座談会

～介護と向き合う家族の思い～



「介護者だより」第1号は、介護経験者三名の方に「参加いただき座談会形式で、家族介護についてお話を伺いました。」

この方々の出会いは、A氏が三年前に妻の介護を始めた時にとっても困られ、同じ体験を持つ介護者の方とお話したいという希望から当時の在宅介護支援センターが関わり、三名が出会うことになりました。
今回は、久しぶりに三名が集まって頂き、当時の介護についてお話を伺いました。

平成十九年三月八日(木)

【参加者】

A氏 脊髄小脳変性症の妻の介護経験者。介護保険サービス当時の支援費、訪問指導、保険外サービスを利用)

B氏 脊髄小脳変性症の妻を現在も介護中。介護保険サービス訪問指導を利用)

C氏 パーキンソン病の妻の介護経験者。介護保険サービス訪問指導を利用)

【進行】

地域包括支援センター
在宅介護支援センター

介護経験の記事募集!!

みなさんの介護経験の記事を募集しています。原稿は全て下記へご送付、あるいはご持参下さい。FAX・メールでもOKです。

感想をお聞かせください!!

「介護者だより」に対するご意見、ご感想をお寄せください。



{送り先}

〒589-0005

大阪狭山市狭山一丁目862番地の5

大阪狭山市地域包括支援センター

()072-368-9922 (FAX)072-368-9933

(Eメール) sayama-hokatsu@ad.wakwak.com

介護者であったということ。

(B) では、Bさん、初めてAさんと会われた時の印象はどうでしたか？
妻の介護が落ち着いてきた頃にAさんのお話家族会があった。
Aさんと初めてお会いした印象は、つまるところまでつまっておられる悲痛な気持ちが伝わってきた。それは、なぜかと言いつつ自分も同じ経験したところだから身にしてみてもか！これでもか！とどうしようもない介護の問題場面に出会う。それは終わる事のない悩み、たまらない気持ちです。自分でできることはやっただが、これ以上続いたらどないもこないもいかんと薬にもすがりたい気持ちでAさんは感じておられたのでしょうか。こちらの話も聞く暇も無いほど話された。

(A) ……今、あの頃を振り返ってみますと妻は、医者から治らないと言われ、寝たきりになると宣告された。突然のことで妻や私はショックを受け、今後の不安でいっぱいだった。

(A) ……その時、難病の奥さんを介護し見送ったCさんや同じ病気で奥さんを介護なさっているBさんがおられることを知り、私はぜひ会いたい！介護の先輩の思いや介護についての意見を聞いてみたい！とにかく頼りたい、すがりたいという思いが痛切に湧き出た。

(B) 家族会を終わってみてどうでしたか？
物言わざるは腹ふくめる思いと昔から言われるが、話すことで少し落ち着かれたと思う。

(A) とにかく気が休まった。
それは、同じ病気を持っている人を一生懸命介護されている話を聞いて自分もくじけてはいけない、頑張らないといけないと勇気をもらった。

(B) 介護をしてくれる人や医療者には話ができないことも同じ立場という形のなかでAさんを夢中で話させたのではないかと。Aさん自身を話させた、正直に話させたと思う。

(C) これがいいのではないかと思った。同じ介護をするものとしてAさんのことを聞き取って「それは良かった大変だったですね、大変な状態が続くかもしれないが、頑張ってください」としか言えないが、私も介護中なので同じだなあと感づいた。

自分自身も介護で悩んでいた

(B) 自分の介護を思い出して試してみても心身ともに混乱していた。妻もそうだと思うが無我夢中だった。
自分との葛藤でも悩み、妻の肌着を洗いながら、男泣きしたこと、もあつた。介護する者、される者、もう無茶苦茶ですわ。とても普通

の状態ではできなかった。そんな状態をしばらく過して、このままではしょうがないというあきらめ？悟り？…あきらめですがそれに慣れてくると今度は不思議と妻の体調も少しずつ落ち着いてきた。気持ちからなのかわからないが、ホッと一息ついた時、体調もよくなることを実感した。

(A) 今のBさんの話を聞いていて確かに私は当時混乱していたと思う。元気だった彼女の病状の進行が早くて、ついていけなかった。気持ちも介護も…。どういつ介護者の方は実際他にもおられるのではないかと。しかし相談相手がいなくてよかつた。同じ介護の話を聞いて落ち着いた。二人がいて非常にプラスになった。周囲の人にはなかなか話せない。やはり実際に介護されている方に話すのが一番いい。

同じ境遇だから話せる

(B) 同じ境遇にならないとなかなか話も聞けない。「あんたもそつか。」「私もそつや。」というところで本当の気持ちが出てくる。同じ境遇でないとできません。愚痴話でいいと思う。共通の思いで胸のつかえが半分消えた。
Cさんが実際の介護現場でこんなことに困った、こんな支援があれば助かったということがありましたか？

近くに介護経験者がいたので頑張れた！

(C) 妻は六十才で症状が出た。それまでは、ボランティアをしており、本人も病気の知識を持っていたので、保健所に相談に行っていた。保健所に難病をかかえる家族の会があり、近くに介護経験者がいたため紹介があった。その方がよくよく家を尋ねてくれた。パーキンソン病の幻覚症状が出ている時、その方が家に来て相談のつてくれた。夜、妻に病気がらくる幻覚がでると眠れない。信じてもらえない

ようなことを経験したが誰にも話せなかった。しかし体験者で、介護経験のある彼には相談できた。彼もまた同じ経験をされていくたのでよく理解し助けてくれた。介護経験者の方がいたので頑張れたんだと思う。

貴重なお話をありがとうございました。介護を受けておられる方も介護をされている家族の方も共に苦しみ、悩みながらもなんとか頑張ろうという思いで、試行錯誤を繰り返しながら日々送られていることをお話ししていただき、ありがとうございました。そのような中でも同じ立場の者同士の語り合いが大きな力になることを伺いました。
介護されるご家族のご意見等をいただきながら少しでもお役に立つお手伝いができればと考えております。
今日はお時間をいただき本当にありがとうございました。

編集後記

このおたよりを作るきっかけは、「私の介護の方法は、これでいいのかしら？他の介護者の方は、どんな介護をされているのかしら？」介護に追われて情報が入りにくいというある介護者家族の方との会話でした。
きつこ「自宅で介護されている方の中には、同じようなお気持ちで日々、介護に奮闘されている方も多いのではないかと思います。このおたよりをおして介護されている方の負担が少しでも軽減できる情報をお伝えできればと思っています。」

このおたよりを最初の一步に皆様のご意見をいただきながら進めていきたいと考えております。

スタッフ一同